

開発によりウラジロ・ミツガシワが消滅 三島郡三島町の自生地

奈良場 正一

自然保護のため大規模開発の場合は、事前に動植物の調査をし、貴重なものについては何らかの保護対策が行なわれるが、小規模のものは貴重なものがあったとしても、知られないまま失われていくことが多いのではなかろうか。

筆者は西山丘陵山地周辺の植物調査をするなかで、ウラジロとミツガシワが自生していたので、この地域としては稀産種であり、分布上興味深いので、観察をしていたが、その自生地が、たまたま公共施設・宅地造成のために消滅してしまったので、ここに記録にとどめ、後日の参考に供することとする。

1. ウラジロ

三島郡三島町鳥越の集落より西側へ500m入った、丘陵山地の杉混生雑木林中（標高60m）に、10株ほど自生しており、暖地性シダの多雪地帯における生育地として興味深い存在であったが、長岡地区衛生処理組合ごみ焼却施設建設のため、1984年に周辺地の樹木が伐採され焼払いが行なわれたので、急きょ標本として保存するとともに、自分で他の場所へ移植をしたが、翌年全部枯死してしまった。なお自生していた場所は、現在ごみ焼却固化灰の貯蔵施設となっている。



(1) 雪中のウラジロ 杉の混じる雑木林に自生
1980, 1, 6



(2) 生育状況は良いが第一次中軸枝のものがほとんどである 1983, 1, 1



(3) 長岡地区衛生処理組合ごみ焼却施設建設（後方に煙突が見える）のため林が伐採され生育が悪くなり葉片が小さくなった。1984, 11, 24



(4) 道路拡巾の土砂に埋没の恐れがあるので他の場所に移植（翌年枯死） 1985, 8, 18



(5) 工事が半分ほどすすみ自生地は完全に跡形もなくなった。1985, 11, 20

2. ミツガシワ

三島郡三島町鳥越上原集落のはずれに、広さ約1,000㎡の御休場堤（オヤスンバツツミ）（標高35m）があり、ミツガシワ、ヒツジグサ、コウホネ等が自生していた。ミツガシワはふつう高地の湿原や沼に生育しているものであるが、残存植物として低地にもはえていることがあり、その一つの自生地として注目していたが、農村地域工業導入団地・住宅団地造成が行なわれることになったので、関係責任者に何とか保護策をとっていただきたいと要請した。

工事施工にあたっては、埋立部分にあったミツガシワは、移植してから埋立をするなど最善の努力を払っていただいたが樹木伐採で環境が激変したことと、湧水の流入減少等が影響したためか、次第に貧弱になり1988年に消滅した。



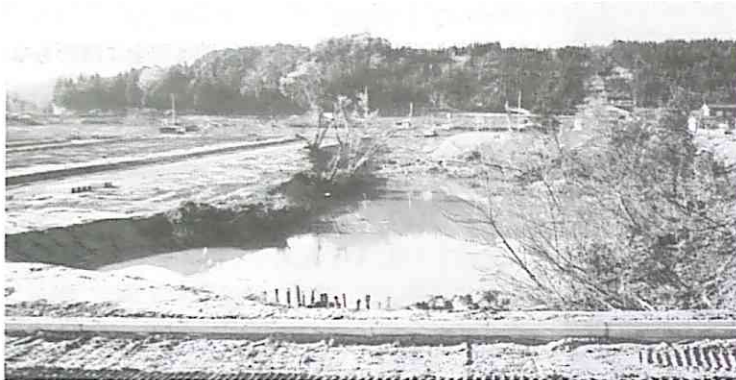
(1) 三島郡三島町鳥越御休場堤（オヤスンバツツミ）
雑木の混じる杉林に囲まれた用水池 ミツガシワ、ヒツジグサ、コウホネ等が自生
1985, 6, 30



(2) ミツガシワ群落 1985, 6, 30



(3) ミツガシワの花 これが最後の花となった。
1986, 5, 17



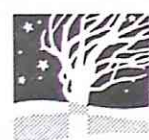
(4) 用水池周辺林は伐採（8月）され、宅地造成がすすんでいる。ミツガシワは池の奥の浅い部分に自生していた。1986, 11, 23



(5) 埋立部分にあったものは、移植するなど保護につとめられたが、環境が変わって、生育不良となり花もつかず、翌年は芽が出なかった。
1987, 5, 22

(植物同好じねんじょ会 ならば・しょういち)

大熊 孝 (新潟大学工学部 教授・土木工学)



とき、もう一度輪廻の思想で対処する必要があると感じるからである。

無論、われわれの今の生活は近代的科学技術の成果にほかならない。だが、その方法論は、自然の中からわれわれに都合の良い部分だけ抽出して扱っているにすぎず、自然が無限度で、自然からの収奪とそれへの廃棄は気ままに永遠に行えるという

正月三日が日は喪中とはいえず、やはり父を偲(しの)んでと酒をのみ、酔いでテレビを眺めていたら、興味深いコマーシャルに出合った。いままでも一、二度見たことがあるが、明石家さんま氏が電柱などに抱きついて、「ぼくの前世は〇〇であったかもしれない」と叫ぶあれである。これは、日本人がお盆の行事などで知らず知らずのうちに教え込まれている「輪廻(のんね)の思想」にあやかっており、先端技術万能時代に意表を突いて面白い。

輪廻の思想

にしても従来海に捨てる程度の発想しかなかった。この考え方は、言わば天国↓現世↓地獄があって、天国からの賜物(たまもの)はすべて取得し、現世のみ繁栄させ、不要になったものは地獄に捨てればよいという、一方通行の思想である。

これに対し、輪廻の思想は、自然や生命を循環的にとらえ、それを尊重するところに特徴がある。今後、ありのままの自然を部分に切り取らずにトータルに扱い、生命の誕生→成長→消滅を循環的にとらえ、その循環系「輪廻」を壊さずに、人間活動をその中にいかに組み込むかが課題である。

こんなことはわれれが先刻ご承知であろうが、ふたんはすくに忘れてしまふ。コマーシャルをきっかけに、あえて年始に肝に銘じておこう。